

ホーリネス系教会に関わる日本人青年(青年期後期)における「キリスト教における宗教性」発達モデルの検討

松島公望¹⁾ 宮下一博²⁾

¹⁾東京大学大学院・総合文化研究科 ²⁾千葉大学・教育学部

Investigation of the Developmental Model of Christian Religiosity for Japanese Christian Adolescents (late adolescence) of Holiness Church

MATSUSHIMA Kobo¹⁾ MIYASHITA Kazuhiro²⁾

¹⁾Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo, Japan

²⁾Faculty of Education, Chiba University, Japan

本研究では、ホーリネス系教会に関わる日本人青年(青年期後期:18～25歳)における「キリスト教における宗教性(Glock, 1962; Verbit, 1970による)」発達モデルを検討した。ライフヒストリー法によって構成した「キリスト教における宗教性」発達モデル(松島, 2007; 松島・宮下, 2008)および宗教意識尺度・宗教知識テスト・宗教行動尺度(松島, 2005, 2007)を用いて、ホーリネス系教会に関わる日本人青年(71名)を対象に、「キリスト教における宗教性」発達モデルにおける各局面ごとの関連・差異を検討した。その結果、宗教意識尺度、宗教知識テスト、宗教行動尺度の得点の高いクリスチャンほど「キリスト教における宗教性」発達モデルに適ったプロセスを経ることが示された。しかし、高次の回心体験以降のそれぞれの局面では、ほとんど関連がみられなかった。

The purpose of this study was to investigate the developmental model of “Christian religiosity (by Glock, 1962; Verbit, 1970)” for Japanese Christian Adolescents (late adolescence: 18–25 years of age) of Holiness church. The relations and differences between phases in the developmental model of Christian religiosity of Holiness church Adolescents (N=71) were examined with the developmental model of Christian religiosity (Matsushima, 2007; Matsushima & Miyashita, 2008) by life history method and Religious Consciousness Scale, Religious Knowledge Test, and Religious Behavior Scale (Matsushima, 2005, 2007). The result suggested that Christian on significantly higher scores of Religious Consciousness Scale, Religious Knowledge Test, and Religious Behavior Scale corresponded to the process of the developmental model of Christian religiosity. However, the result showed that the phases in the developmental model of Christian religiosity after the phase of higher level of conversion had little relation.

キーワード: 「キリスト教における宗教性」発達モデル (the developmental model of Christian religiosity)
ホーリネス系教会 (Holiness church) 日本人青年 (Japanese adolescents)
青年期後期 (late adolescence) クリスチャン (Christian)

問題と目的

宗教性発達は、幼少期から始まり、青年期になると自覚的になるといったように各発達段階において異なった現れ方をみせるといわれている(長谷川, 1969; 松本, 1979など)。すなわち、成人期は成人期の宗教性の様相があり、青年期は青年期の宗教性の様相があることが示されている。

筆者は、これまでにGlock (1962), Verbit (1970) の宗教性の6次元および作道 (1983, 1984a, 1984b, 1986) の宗教的社会化¹⁾を基に、7人の神学生の口述資料、文献資料にしたがって検討し、ホーリネス系教会に関わる日本人クリスチャンにおける「キリスト教における宗教性(以下、本論文では「宗教性」と記す)」発達

モデルを構成した(松島, 2007; 松島・宮下, 2008: Figure 1を参照)。さらに、ホーリネス系教会に関わる日本人成人の「宗教性」発達について、構成した「宗教性」発達モデルの発達プロセスが成人にとって妥当であるかを数量的に検討した(松島, 2009)。

青年期においても、前期・中期では、宗教的覚醒がなされ自分が信者であることを自覚する者や、反対に宗教的権威や宗教教育に強く反発する者が現れるといわれている(星野, 1977)。後期になると、宗教的権威などに対する反抗も、ただ否定するのではなく、その正しいところを正当に評価して受容できるようになったり、人生の意味や目的を深く、かつ冷静に考えることができるようになったりと安定したクリスチャン生活を送ることが多いことがいわれている(長谷川, 1969)。このように青年期の各下位段階においても通して宗教性は異なった様相を示している。

連絡先著者: 松島公望

そこで本研究では、ホーリネス系教会に関わる青年期後期（18～25歳）にあたる日本人青年（以下、青年と記す）を対象にすることにより、構成した「宗教性」発達モデルの発達プロセスが青年にとって妥当であるかを検討したいと考えている。

本研究における「宗教性」は次のように定義される（松島，2006，2007）。「宗教性」とは、「個人がどの程度キリスト教的であるか」を測定する指標であり、個人がキリスト教についてどの程度、「信じるのか、感じるのか（宗教意識）」、「振る舞うのか（宗教行動）」を表す。宗教意識とは、信念や知識が関わる「認知的成分（信じる）」と情緒的な体験が関わる「感情的成分（感じる）」を含む概念であり、「行動的成分（振る舞う）」は宗教行動に相当する。宗教意識と宗教行動を包括する枠組が「宗教性」といえる（Cornwall, Albrecht, Cunningham, & Pitcher, 1986）。

「宗教性」の枠組にしたがい、Glock（1962）が提示した「信念、知識、体験、行動、効果」の5次元の指標を援用した。「信念」とは宗教的な教えを信じること、「知識」とは教義、教典に関する情報を有すること、「体験」とは回心体験などを含み、宗教的経験や宗教的感情を持つこと²⁾、「行動」とは礼拝、祈りなどといった特定の宗教的行動である。また、「効果」とは以上の4つの次元が信者の生活や行動、精神などに及ぼす（キリストチャンになることによって受ける）社会的、世俗的な影響を意味する。「効果」はさらに「報酬」と「責任」に分けられる。「報酬」とは個人における心の平安、悩みからの解放、幸福感などを指し、「責任」とは倫理的禁止の受容や、宗教集団における責務を全うすることを指す。

今田（1955）は、個人の宗教性発達において宗教集団を始めとする宗教的環境から大きな影響を受けると示唆している。日本のキリスト教においても、教会内でのキリストチャンとの関係が個人の「宗教性」に影響を与えることが想定されることから、Verbit（1970）が提唱した「共同体」の次元を援用することとした。「共同体」とは、信仰を介した対人的・情緒的な関わりを指し、集団への帰属感や社会化の促進に関連する。また、「共同体」は、宗教意識に位置づけられ、「体験」と同様に感情成分に含まれる。

以上、「宗教性」を整理すると「信念・知識」は認知的成分、「体験・共同体」は感情的成分であり、この4つの次元が「宗教意識」に分類される。「行動」は行動的成分であり、「宗教行動」に位置づけられる。「効果」は、すべての次元からの影響を示す内容であるから、「宗教意識」、「宗教行動」両方に含まれる。

上記の「宗教性」の概念を基にして、本研究では、構成した「宗教性」発達モデルの発達プロセスが青年にとって妥当であるかを検討する。そのため「宗教性」発達モデルの検討では、各局面に対応した相応しいデータおよび「宗教性」に関する尺度（松島，2005，2007）を用いることによって、各局面ごとの関連・差異を検討することとする。

各局面ごとの分析にあたっては、以下のような分類を行う。

まず、ホーリネス系教会では、本人の自覚に基づいた

回心体験によるキリストチャンの信仰成長を重視していることから（小林，2004），回心体験の有無によって分類を行う。すなわち，回心体験の分類については，「回心体験（救いの体験³⁾）がある」，「高次の回心体験（きよ

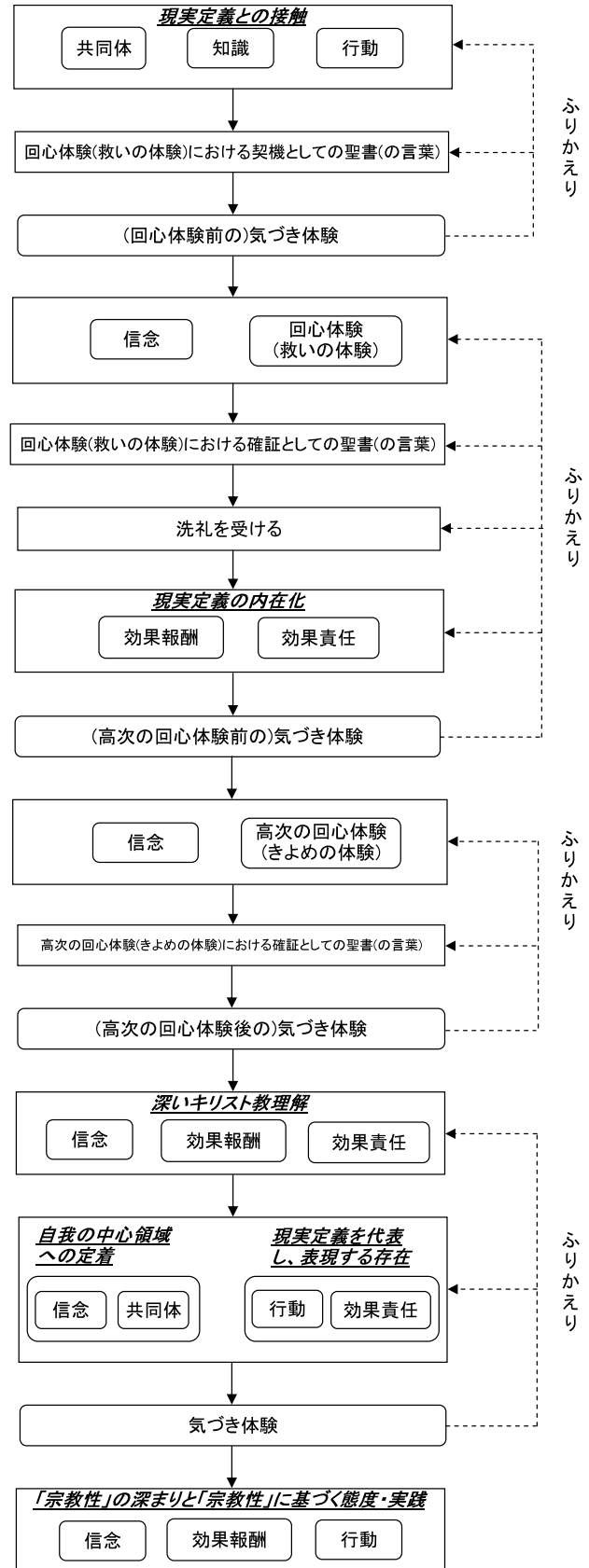


Figure 1 日本人キリストチャンにおける「宗教性」発達モデル

めの体験⁴⁾がある」の両方に回答した者を高次の回心体験群（以下、高次体験群）とする。「回心体験（救いの体験）がある」のみ回答した者を回心体験群とする。「回心体験がない」と回答した者を非クリスチャン群とする。

分析に必要な場合を除いて、それぞれの回心体験以降については、その体験をしていない対象者は分析対象から外し、それぞれの回心体験以降のプロセスは、その体験をした対象者のみ分析対象とする。

また、「回心体験（高次の回心体験）における契機としての聖書（の言葉）」、「回心体験（高次の回心体験）における確証としての聖書（の言葉）」、「洗礼を受ける」については、言葉（洗礼）あり群、言葉（洗礼）なし群に分類し、高次体験群および回心体験群と組み合わせて分析を行う。

さらに、回心体験や聖書の言葉等における「なし」群については、「わからない」と回答した者も「なし」群とした。その理由として、ホーリネス系教会では回心体験では本人の自覚を重視していることから、「わからない＝明確な自覚がない」と判断することができるので、「わからない」と回答した者についても「なし」群として扱うこととする。

方 法

(1) 質問紙の構成

本研究の質問紙は、Glock（1962）とVerbit（1970）の「宗教性」に基づく宗教意識尺度⁵⁾・宗教知識テスト⁶⁾・宗教行動尺度によって構成されている。

本研究で使用した質問項目は、以下の通りである。

Table 1 宗教意識尺度 質問項目

信念
私は、いくら豊かな生活をしていても、神に従わない生活は、本当に幸福だとはいえないと思う。 神を信じれば、人間は苦しみや悲しみの中に希望を見出すことができると思う。 私は、信仰に裏打ちされた生き方こそ、人の真の生き方であると思う。 私は、どんなに科学が進んだとしても、人間は信仰がなければ幸せにはなれないと思う。
体験
私は、自分が、神の前にいるという感覚がある。 私は、聖霊が私の人生で積極的に働いているのを感じる。 私は、包み込むような温かさを、神に感じる。 私は、神の愛をひしひしと感じている。 私は、神がいつも自分と共にあり、神によって守られていると感じる。 私は、教会で礼拝したとき、神様が現にそこにいるのを感じる。 祈りの中で、または日常生活の重要な場面で、私は、神を近くに感じる。 私は、神との間の交わりを経験したことがある。 私が、今の職業(身分)については、神の計画によっているのだと感じる。
共同体
私は、教会の活動を通じて、信者同士のつながりとその楽しさを感じることができる。 私は、クリスチャンの友人との交わりを通して、神の心を知ることもある。 私にとって、教会は親しみを覚える場所である。 私は、教会の壮年会、婦人会、青年会などに参加することによって、教会の仲間と親しい交わりをしている。 私は、クリスチャンの友人と交わったり、その生き方を知ることによって、自らの信仰を省みている。 私は、自分の教会の仲間を素晴らしい人だと思う。
効果報酬
キリスト教は、私の人生の全てに影響している。 私は、信仰によって、自分を見つめることができた。 私は、信仰によって、感謝する気持ちを学ぶことができた。 私は、信仰によって、悲しみがやわらげられ、教わられた。 キリスト教は、私に、人生観、世界観、価値観の基準を与えてくれる。
効果責任
私たちは、教会に献金する義務がある。 私たちは、教会の中で奉仕する義務がある。 私たちは、家族や周囲の人々に伝道する義務がある。 私たちは、毎週、礼拝に出席する義務がある。 私たちは、毎週、祈禱会に出席する義務がある。

①**宗教意識尺度** 松島（2005）の成人版宗教意識尺度を使用した。本尺度は、「信念」4項目、「体験」9項目、「共同体」6項目、「効果報酬」5項目、「効果責任」5項目の5つの下位尺度からなる。選択肢は、「まったくあてはまらない、あまりあてはまらない、少しあてはまる、中程度にあてはまる、かなりよくあてはまる、非常によくあてはまる」の6段階評定（1～6点）である⁷⁾。本尺度の信頼性と妥当性は松島（2005）により確認されている。本尺度の項目はTable 1に示す。また、本研究における内的整合性は、「信念」： $\alpha = .896$ 、「体験」： $\alpha = .909$ 、「共同体」： $\alpha = .859$ 、「効果報酬」： $\alpha = .855$ 、「効果責任」： $\alpha = .891$ であった。

②**宗教知識テスト** 松島（2007）の成人版宗教知識テストを使用した。本テストは、記述回答式および多肢選択法であり、8項目からなる。本テストの信頼性と妥当性は松島（2007）により確認されている。本尺度の項目はTable 2に示す。また、本研究における内的整合性は、 $\alpha = .548$ であった⁸⁾

③**宗教行動尺度** 松島（2007）の成人版宗教行動尺度を使用した。本尺度は、8項目からなる。選択肢は6段階評定（1～6点）であるが、各項目で選択肢の内容が異

Table 2 宗教知識テスト 質問項目

- ①旧約聖書の預言者ではないのは以下の誰ですか。
(1)エリヤ (2)エレミヤ (3)パウロ (4)エゼキエル (5)イザヤ
- ②どれが旧約聖書の預言書に含まれていないものですか。
(1)ゼカリヤ書 (2)ナホム書 (3)バルク書 (4)ハバク書 (5)オバデア書
- ③4つの福音書を以下に書いて下さい。
() () () ()
- ④以下のカッコの中を埋めてください。
4-1. 金持ちが神の国に入るよりも、() を通る方が簡単である。
4-2. 心の清い人たちは、さいわいである。彼らは() であろう。
- ⑤以下の聖書の言葉の引用箇所を書いて下さい。
『神のなさることは皆その時にかなって美しい』
() () 章() 節
- ⑥以下の引用された聖書の言葉を書いて下さい。
6-1. ヘブル人への手紙11章1節
()
6-2. コリント人への第二の手紙5章17節
()

Table 3 宗教行動尺度 質問項目

- あなたは、この1年の間で、どれくらい未信者の人を教会に誘いましたか。
- あなたは、この1年の間で、どれくらい教会の仕事(教会のそじ、聖務当番、週報の印刷など)を手伝って奉仕しましたか。
- あなたは、この1年の間で、どれくらい教会のチラシ配布をしましたか。
- あなたは、過去1年の間で、どれくらい祈禱会に出席しましたか。
- あなたは、この1年の間で、どれくらいキリスト教に関する書物(信仰書・霊想書)を読みましたか。
- あなたは、この1ヶ月の間に、1日にどれくらい個人的に聖書を読みましたか。
- あなたは、過去1年の間で、どれくらい礼拝に出席しましたか。
- あなたは、この1年の間で、どれくらい家族や友人、知人にイエス・キリストや聖書の話をしましたか。

なる⁹⁾。本尺度の信頼性と妥当性は松島(2007)により確認されている。本尺度の項目はTable 3に示す。また、本研究における内的整合性は、 $\alpha = .761$ であった。

(2) 調査対象者

回収数は、78名であった。そのうち有効回答数は71名(有効回答率91.0%；男性25名、女性45名、不明1名；年齢範囲18～25歳(平均年齢21.9歳)；全国大会、2つのキャンプ、1つの特別集会、3教会)であった。

回心体験別の該当者数は、高次体験群が17名、回心体験群が38名、非クリスチャン群が12名であった(該当者数の合計が有効回答数と異なるのは、欠損値のためである)。

(3) 調査時期

2004年8月～11月。

(4) 手続き

教会での調査は、各教会に質問紙を郵送し、牧師の指示のもと個別に記入してもらい後日回収した。キャンプや全国集会等では、筆者が教示を行い、調査を行い、期間内に回収するか、後日郵送してもらった。全ての調査において、教示の際に、調査への回答を拒否する権利があることを伝えた上で調査を実施した。

結 果

青年における「宗教性」発達モデルの各局面ごとの検討を行った。結果をFigure 2およびFigure 3に示す(Figure 2およびFigure 3については有意な結果のみを示している)。以下、各局面ごとの分析結果を記述する。

[1] 現実定義との接触 [[共同体]・[知識]・[行動]]

→回心体験における契機としての聖書(の言葉)[有無]

現実定義との接触 [[共同体]・[知識]・[行動]] から回心体験における契機としての聖書(の言葉)の有無(以下、契機の聖書とする)との関連を検討するために、「共同体」・「知識」・「行動」を説明変数、契機の聖書の有無を目的変数として、判別分析を行った¹⁰⁾。結果をTable 4に示す。その結果、正準相関係数は有意ではなく、「共同体」・「知識」・「行動」と契機の聖書の有無との間に関連がみられないことが示された。

[2] 現実定義との接触 [[共同体]・[知識]・[行動]] →「気づき体験」

[1]で有意な関連がみられなかったことから、高次体験群および回心体験群について、現実定義との接触 [[共同体]・[知識]・[行動]]と「気づき体験」がどのように関連しているかを検討するために、「信念」を目的変数、「共同体」・「知識」・「行動」を説明変数として重回帰分析を行った(高次体験群： $R^2 = .379(n.s.)$, $N = 15$ ；回心体験群： $R^2 = .324(p < .01)$, 「共同体」： $\beta = .210(n.s.)$, 「知識」： $\beta = .249(n.s.)$, 「行動」： $\beta = .315(n.s.)$, $N = 34$)。決定係数は、回心体験群で有

意な値を示し、高次体験群では有意な値は示さなかった。標準偏回帰係数の値をみると、回心体験群で有意な値は示さなかった。

[3] 回心体験における契機としての聖書(の言葉)[有無] →「気づき体験」

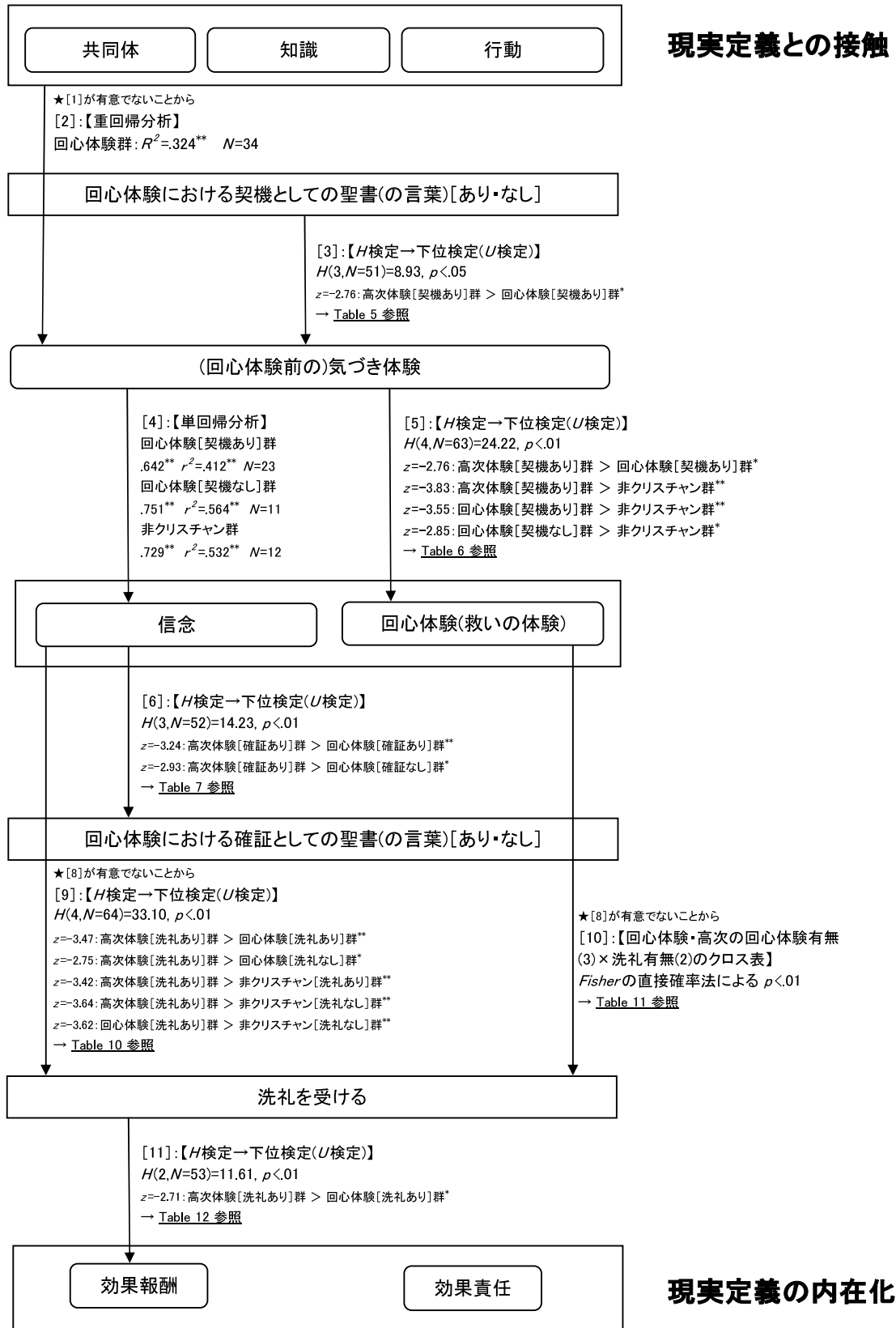
クリスチャンについて、契機の聖書の有無と「気づき体験」との関連を検討するために、クラスカル・ウォリスの検定を行った(Table 5参照)。その結果、4群間に有意差が認められた($H(3, N = 51) = 8.93$, $p < .05$)。下位検定の結果、高次体験[契機あり]群と回心体験[契機あり]群との間に有意差が認められた。契機の聖書の有無には有意な差が認められなかったが、契機の聖書がある高次体験群と契機の聖書のある回心体験群との間に有意な差がみられた。

[4] (回心体験前の)「気づき体験」→「信念」

クリスチャン群(高次体験群、回心体験群)における契機の聖書のあり・なし群および非クリスチャン群について、「気づき体験」と「信念」がどのように関連しているかを検討するために、「信念」を目的変数、「体験」を説明変数として単回帰分析を行った。決定係数は、回心体験[契機あり]群($r^2 = .412(p < .01)$, $b = .642(p < .01)$, $N = 23$)、回心体験[契機なし]群($r^2 = .564(p < .01)$, $b = .751(p < .01)$, $N = 11$)、非クリスチャン群($r^2 = .532(p < .01)$, $b = .729(p < .01)$, $N = 12$)で有意な値を示し、高次体験[契機あり]群、高次体験[契機なし]群では有意な値は示さなかった(高次体験[契機あり]群, $r^2 = .024(n.s.)$, $N = 13$ ；高次体験[契機なし]群, $r^2 = .598(n.s.)$, $N = 3$)。回帰係数の値をみると、回心体験[契機あり]群、回心体験[契機なし]群、非クリスチャン群で「気づき体験」が「信念」に正の影響を与えていることが示された。非クリスチャン群についても有意な関連を示したのは、たとえキリスト教を信じていなくても、教会やキリスト教に関わっていること自体が正の影響を与える要因になっているのではないかと思われる。高次体験[契機なし]群では有意な値は示さなかったが、対象人数($N = 3$)が少ないことが影響していると考えられる。しかし、高次体験[契機あり]群では「気づき体験」と「信念」との間には関連がないとの結果となった。

[5] (回心体験前の)「気づき体験」→回心体験(救いの体験)[有無]

クリスチャン群(高次体験群、回心体験群)における契機の聖書のあり・なし群および非クリスチャン群について、回心体験の有無と「気づき体験」との関連を検討するために、クラスカル・ウォリスの検定を行った(Table 6参照)。その結果、5群間に有意差が認められた($H(4, N = 63) = 24.22$, $p < .01$)。下位検定の結果、高次体験[契機あり]群が、回心体験[契機あり]群および非クリスチャン群よりも有意に高い得点を示した。また、回心体験[契機あり]群および回心体験[契機なし]群が、非クリスチャン群よりも有意に高い得点を示した。



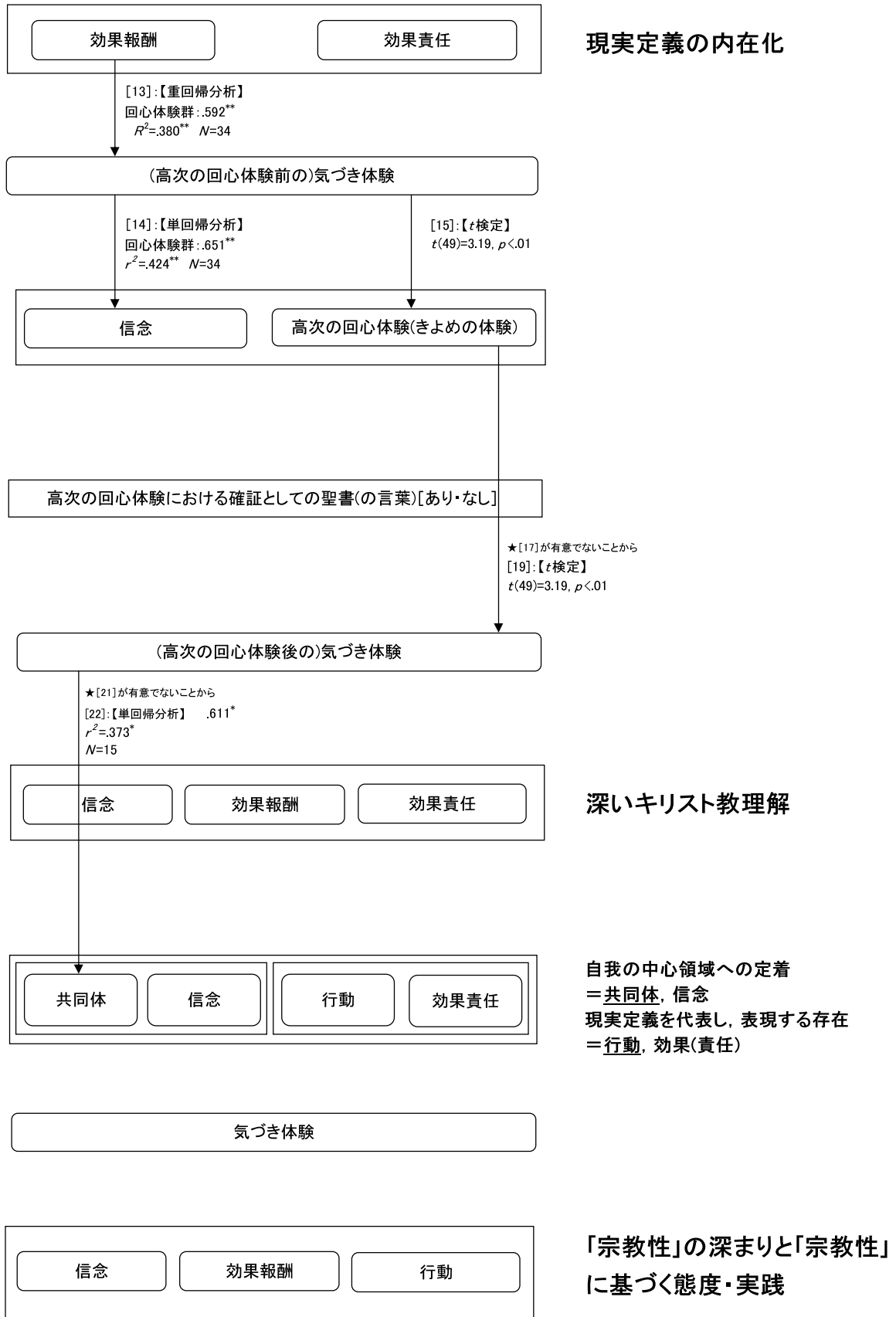
* $p<0.05$ ** $p<0.01$

Figure 2 「宗教性」発達モデルにおける各局面ごとの分析結果(1)

[6] 信念→回心体験における確認としての聖書(の言葉) [有無]

クリスチャン群(高次体験群, 回心体験群)について, 回心体験における確認としての聖書(の言葉)(以下,

確認の聖書とする)の有無と「信念」との関連を検討するために, クラスカル・ウォリスの検定を行った(Table 7参照)。その結果, 4群間に有意差が認められた($H(3, N=52)=14.23, p<0.01$)。下位検定の結果, 高



* $p<.05$ ** $p<.01$

Figure 3 「宗教性」発達モデルにおける各局面ごとの分析結果(2)

Table 4 判別分析結果

	第1判別関数	第2判別関数
正準相関	.407	.120
ρ 値	.175	.715
説明率	93.09	6.91

次体験〔確認あり〕群が、回心体験〔確認あり〕群および回心体験〔確認なし〕群よりも有意に高い得点を示した。確認としての聖書がある高次体験のあるクリスチャンは、回心体験のみのクリスチャンよりも高い「信念」を有していることが示された。

[7] 回心体験→回心体験における確認としての聖書（の言葉）〔有無〕
クリスチャン群（高次体験群，回心体験群）について、

Table 5 「体験」得点の平均値，中央値，標準偏差，人数，ノンパラメトリック検定分析結果

クリスチャン	高次体験 〔契機あり〕群	高次体験 〔契機なし〕群	回心体験 〔契機あり〕群	回心体験 〔契機なし〕群
平均値	46.77	44.33	40.04	39.82
中央値	50.00	43.00	40.00	42.00
標準偏差	6.88	7.09	6.42	7.05
人数	13	3	24	11
平均ランク	36.12	30.00	22.02	21.64
H検定	$H(3, N=51)=8.93^*$			
下位検定(U検定):ボン フェローニの修正済	$z=-2.76$: 高次体験〔契機あり〕群(平均ランク25.65) > 回心体験〔契機あり〕群(平均ランク15.40)*			

* $p < .05$

Table 6 「体験」得点の平均値，中央値，標準偏差，人数，ノンパラメトリック検定分析結果

	クリスチャン				非クリスチャン群
	高次体験 〔契機あり〕群	高次体験 〔契機なし〕群	回心体験 〔契機あり〕群	回心体験 〔契機なし〕群	
平均値	46.77	44.33	40.04	39.82	29.92
中央値	50.00	43.00	40.00	42.00	33.00
標準偏差	6.88	7.09	6.42	7.05	7.76
人数	13	3	24	11	12
平均ランク	47.50	41.50	32.42	31.82	12.17
H検定	$H(4, N=63)=24.22^{**}$				
	$z=-2.76$: 高次体験〔契機あり〕群(平均ランク25.65) > 回心体験〔契機あり〕群(平均ランク15.40)*				
下位検定(U検定):ボン フェローニの修正済	$z=-3.83$: 高次体験〔契機あり〕群(平均ランク18.38) > 非クリスチャン群(平均ランク7.17)**				
	$z=-3.55$: 回心体験〔契機あり〕群(平均ランク22.90) > 非クリスチャン群(平均ランク9.71)**				
	$z=-2.85$: 回心体験〔契機なし〕群(平均ランク16.18) > 非クリスチャン群(平均ランク8.17)*				

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 7 「信念」得点の平均値，中央値，標準偏差，人数，ノンパラメトリック検定分析結果

クリスチャン	高次体験 〔確認あり〕群	高次体験 〔確認なし〕群	回心体験 〔確認あり〕群	回心体験 〔確認なし〕群
平均値	22.77	22.50	19.32	19.46
中央値	24.00	22.50	20.00	20.00
標準偏差	1.54	1.29	3.58	3.86
人数	13	4	22	13
平均ランク	38.35	35.75	20.68	21.65
H検定	$H(3, N=52)=14.23^{**}$			
下位検定(U検定):ボン フェローニ修正済	$z=-3.24$: 高次体験〔確認あり〕群(平均ランク25.23) > 回心体験〔確認あり〕群(平均ランク13.73)**			
	$z=-2.93$: 高次体験〔確認あり〕群(平均ランク17.81) > 回心体験〔確認なし〕群(平均ランク9.19)*			

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 8 回心体験別(2)×回心体験における確認としての聖書（の言葉）の有無(2)のクロス表

回心体験別	回心体験における確認としての聖書 の有無〔人数(%)〕		合計
	あり	なし	
クリスチャン高次体験群	13(76.47)	4(23.53)	17(100.00)
調整済み残差	0.9	-0.9	
クリスチャン回心体験群	24(64.86)	13(35.14)	37(100.00)
調整済み残差	-0.9	0.9	
合計	37(68.52)	17(31.48)	54(100.00)

$\chi^2(1, N=54)=0.73, n.s.$

Table 9 回心体験における確証としての聖書（の言葉）の有無(4)×洗礼の有無(2)のクロス表

回心体験における確証としての聖書の有無		洗礼の有無[人数(%)]		合計
		あり	なし	
クリスチャン	あり	13(100.00)	0(0.00)	13(100.00)
高次体験群	なし	3(75.00)	1(25.00)	4(100.00)
クリスチャン	あり	21(87.50)	3(12.50)	24(100.00)
回心体験群	なし	13(100.00)	0(0.00)	13(100.00)
合計		50(92.59)	4(7.41)	54(100.00)

Fisherの直接確率法による $p=.220(n.s.)$

Table 10 「信念」得点の平均値、中央値、標準偏差、人数、ノンパラメトリック検定分析結果

	クリスチャン			非クリスチャン	
	高次体験 [洗礼あり]群	回心体験 [洗礼あり]群	回心体験 [洗礼なし]群	[洗礼あり]群	[洗礼なし]群
平均値	22.75	19.91	14.67	15.50	12.83
中央値	23.50	20.00	15.00	14.00	14.00
標準偏差	1.48	3.19	5.51	3.33	3.19
人数	16	33	3	6	6
平均ランク	49.84	33.44	14.50	14.75	7.83
H検定	$H(4, N=64)=33.10^{**}$				
	$z=-3.47$: 高次体験[洗礼あり]群(平均ランク35.06) > 回心体験[洗礼あり]群(平均ランク20.12)**				
	$z=-2.75$: 高次体験[洗礼あり]群(平均ランク11.47) > 回心体験[洗礼なし]群(平均ランク2.17)*				
下位検定(U検定):ボン フェローニ修正済	$z=-3.42$: 高次体験[洗礼あり]群(平均ランク14.31) > 非クリスチャン[洗礼あり]群(平均ランク4.00)**				
	$z=-3.64$: 高次体験[洗礼あり]群(平均ランク14.50) > 非クリスチャン[洗礼なし]群(平均ランク3.50)**				
	$z=-3.62$: 回心体験[洗礼あり]群(平均ランク22.80) > 非クリスチャン[洗礼なし]群(平均ランク4.58)**				

* $p<.05$, ** $p<.01$

Table 11 回心体験・高次の回心体験の有無(3)×洗礼の有無(2)のクロス表

回心体験・高次の回心体験の有無	洗礼の有無[人数(%)]		合計
	あり	なし	
クリスチャン高次体験群	16(94.12)	1(5.88)	17(100.00)
クリスチャン回心体験群	35(92.11)	3(7.89)	38(100.00)
非クリスチャン群	6(50.00)	6(50.00)	12(100.00)
合計	57(85.07)	10(14.93)	67(100.00)

Fisherの直接確率法による $p<.01$

回心体験と確証の聖書の有無との連関を検討するために、 2×2 のクロス表による χ^2 検定を行った (Table 8参照)。その結果、有意な連関がみられなかった ($\chi^2(1, N=54)=0.73, n.s.$)。回心体験の違いと確証の聖書の有無との間には有意な連関はみられないことが示された。

[8] 回心体験における確証としての聖書（の言葉）[有無] → 洗礼を受ける [有無]

クリスチャン群（高次体験群、回心体験群）について、確証の聖書の有無と洗礼の有無の連関を検討するために、 4×2 のクロス表によるFisherの直接確率法を行った (Table 9参照)。その結果、有意な連関がみられなかった。したがって、高次体験群、回心体験群ともに確証の聖書の有無では、洗礼の有無と連関がないことが示された。

[9] 信念→洗礼を受ける [有無]

[8] で有意な連関がみられなかったことから、クリスチャン群（高次体験群、回心体験群）および非クリスチャン群について、洗礼の有無と「信念」との関連を検討するために、クラスカル・ウォリスの検定を行った

(Table 10参照)¹¹⁾。その結果、5群間に有意差が認められた ($H(4, N=64)=33.10, p<.01$)。下位検定の結果、高次体験 [洗礼あり] 群が、回心体験 [洗礼あり] 群、回心体験 [洗礼なし] 群、非クリスチャン [洗礼あり] 群、非クリスチャン [洗礼なし] 群よりも有意に高い得点を示した。また、回心体験 [洗礼あり] 群が、非クリスチャン [洗礼なし] 群よりも有意に高い得点を示した。洗礼を受けている高次体験のあるクリスチャンは、回心体験のみのクリスチャンおよび非クリスチャンよりも高い「信念」を有していることが示された。

[10] 回心体験 [有無] → 洗礼を受ける [有無]

[8] で有意な連関がみられなかったことから、回心体験の有無と洗礼の有無との連関を検討するために、 3×2 のクロス表によるFisherの直接確率法を行った (Table 11参照)。その結果、1%水準で有意な連関が認められた。したがって、回心体験の有無が、洗礼の有無に影響することが示された。

Table 12 「効果報酬」得点の平均値、中央値、標準偏差、人数、ノンパラメトリック検定分析結果

クリスチャン	高次体験 [洗礼あり]群	回心体験 [洗礼あり]群	回心体験 [洗礼なし]群
平均値	27.69	25.76	21.67
中央値	29.00	26.00	20.00
標準偏差	3.38	2.70	2.89
人数	16	34	3
平均ランク	36.25	24.35	7.67
H検定	H(2,N=53)=11.61**		
下位検定(U検定):ボン フェローニ修正済	z=-2.71; 高次体験[洗礼あり]群(平均ランク33.56) > 回心体験[洗礼あり]群(平均ランク21.71)*		

*p<.05, **p<.01

Table 13 「効果責任」得点の平均値、中央値、標準偏差、人数、ノンパラメトリック検定分析結果

	高次体験 [洗礼あり]群	回心体験 [洗礼あり]群	回心体験 [洗礼なし]群
平均値	21.88	20.21	20.00
中央値	25.00	21.00	21.00
標準偏差	8.05	6.05	2.65
人数	16	33	3
平均ランク	31.59	24.59	20.33
H検定	H(2,N=52)=2.85		

[11] 洗礼を受ける[有無]→現実定義の内在化（「効果報酬」）

クリスチャン群について、洗礼の有無と現実定義の内在化を示す「効果報酬」との関連を検討するために、クラスカル・ウォリスの検定を行った（Table 12参照）。その結果、3群間に有意差が認められた（ $H(2, N=53)=11.61, p<.01$ ）。下位検定の結果、高次体験[洗礼あり]群が、回心体験[洗礼あり]群よりも有意に高い得点を示した。洗礼の有無では違いがみられなかったが、洗礼を受けている高次体験のあるクリスチャンは、洗礼を受けている回心体験のあるクリスチャンよりも高い「効果報酬」を有していることが示された。

[12] 洗礼を受ける[有無]→現実定義の内在化（「効果責任」）

クリスチャン群について、洗礼の有無と現実定義の内在化を示す「効果責任」との関連を検討するために、クラスカル・ウォリスの検定を行った（Table 13参照）。その結果、3群間に有意差がみられなかった（ $H(2, N=52)=2.85, n.s.$ ）。「効果報酬」とは異なり、「効果責任」では、回心体験および洗礼の有無の違いによって有意な差異はみられないことが示された。

[13] 現実定義の内在化（「効果報酬」・「効果責任」）→（高次の回心体験前の）「気づき体験」

クリスチャン群（高次体験群、回心体験群）における現実定義の内在化を示す「効果報酬」・「効果責任」と（高次の回心体験前の）「気づき体験」がどのように関連しているかを検討するために、「体験」を目的変数、「効果報酬」・「効果責任」を説明変数として重回帰分析を行った。決定係数は、回心体験群で有意な値を示し、高次体験群では有意な値は示さなかった（高次体験群： $R^2=.253 (n.s.)$, $N=16$; 回心体験群： $R^2=.380 (p<.01)$, 「効

果報酬」： $\beta=.592 (p<.01)$, 「効果責任」： $\beta=.068 (n.s.)$, $N=34$ ）。標準偏回帰係数の値をみると、回心体験群の「効果報酬」が正の影響を与えていることが示された。

[14] （高次の回心体験前の）「気づき体験」→「信念」

クリスチャン群（高次体験群、回心体験群）における（高次の回心体験前の）「気づき体験」と「信念」がどのように関連しているかを検討するために、「信念」を目的変数、「体験」を説明変数として単回帰分析を行った。決定係数は、回心体験群で有意な値を示し、高次体験群では有意な値は示さなかった（高次体験群： $r^2=.056 (n.s.)$, $N=16$; 回心体験群： $r^2=.424 (p<.01)$, $b=.651 (p<.01)$, $N=34$ ）。回帰係数の値をみると、回心体験群で「気づき体験」が「信念」に正の影響を与えていることが示された。

[15] （高次の回心体験前の）「気づき体験」→高次の回心体験（きよめの体験）[有無]

クリスチャン群について、（高次の回心体験前の）「気づき体験」と高次の回心体験の有無（高次体験群、回心体験群）との関連を検討するために、 t 検定を行った。その結果、1%水準で有意差が認められた（ $t(49)=3.19, p<.01$ ：高次体験群： $M=46.31, SD=6.75, N=16$; 回心体験群： $M=39.97, SD=6.52, N=35$ ）。高次体験のあるクリスチャンは、回心体験のみのクリスチャンよりも高い「気づき体験」を有していることが示された。

[16] 信念→高次の回心体験における確証としての聖書（の言葉）[有無]

高次体験群について、「信念」と高次の回心体験における確証としての聖書（の言葉）（以下、高次体験の確

Table 14 高次の回心体験における確認としての聖書（の言葉）の検討

高次の回心体験有	高次の回心体験における確認としての聖書の有無[人数(%)]		合計
	あり	なし	
クリスチャン高次体験群	9(52.94)	8(47.06)	17(100.00)
合計	9(52.94)	8(47.06)	17(100.00)

$$\chi^2(1, N=17)=0.06, n.s.$$

証の聖書とする)の有無との関連を検討するために、 t 検定を行った。その結果、有意差がみられなかった ($t(15)=1.25, n.s.$: 高次体験 [確認あり] 群: $M=23.11, SD=1.36, N=9$; 高次体験 [確認なし] 群: $M=22.25, SD=1.49, N=8$)。高次体験の確認の聖書の有無によって「信念」に有意な差異はみられなかった。

[17] 高次の回心体験→高次の回心体験における確認としての聖書（の言葉）[有無]

高次体験群について、高次体験の確認の聖書の有無を検討するために、 χ^2 検定を行った (Table 14参照)。その結果、有意な連関がみられなかった。したがって、高次体験群においては、高次体験の確認の聖書の有無に有意な連関がみられないことが示唆された。

[18] 信念→(高次の回心体験後の)「気づき体験」

[16] で有意差がみられなかったことから、高次体験群について、「信念」と(高次の回心体験後の)「気づき体験」がどのように関連しているかを検討するために、「体験」を目的変数、「信念」を説明変数として単回帰分析を行った。決定係数は、有意な値を示さなかった (高次体験群 $r^2=.056(n.s.)$, $N=16$)。高次体験群では、「信念」と「気づき体験」との間で有意な関連がないことが示された。

[19] 高次の回心体験(きよめの体験)[有無]→(高次の回心体験後の)「気づき体験」

[17] で有意な連関がみられなかったことから、クリスチャンについて、高次の回心体験の有無(高次体験群、回心体験群)と「気づき体験」との関連を検討するために、 t 検定を行った。その結果、1%水準で有意差が認められた ($t(49)=3.19, p<.01$: 高次体験群: $M=46.31, SD=6.75, N=16$; 回心体験群: $M=39.97, SD=6.52, N=35$)。高次体験のあるクリスチャンは、回心体験のみのクリスチャンよりも高い「気づき体験」を有していることが示された。

[20] 高次の回心体験における確認としての聖書（の言葉）[有無]→(高次の回心体験後の)「気づき体験」

高次体験群について、高次体験の確認の聖書の有無と(高次の回心体験後の)「気づき体験」の関連を検討するために、 t 検定を行った。その結果、有意差がみられなかった ($t(10.54)=1.99, n.s.$: 高次体験 [確認あり] 群: $M=49.38, SD=4.03, N=8$; 高次体験 [確認なし] 群: $M=43.25, SD=7.74, N=8$)。高次体験の確認の聖書の有無によって「気づき体験」に有意な差

異はみられなかった。

[21] (高次の回心体験後の)「気づき体験」→深いキリスト教理解 [[信念]・[効果報酬]・[効果責任]]

(高次の回心体験後の)「気づき体験」と高次体験群における「深いキリスト教理解」を示す [[信念]・[効果報酬]・[効果責任]] がどのように関連しているかを検討するために、「信念」・[効果報酬]・[効果責任]をそれぞれ目的変数、「体験」を説明変数として単回帰分析を行った。全ての単回帰分析における決定係数は、有意な値は示さなかった ([信念]: $r^2=.056(n.s.)$, $N=16$; [効果報酬]: $r^2=.209(n.s.)$, $N=16$; [効果責任]: $r^2=.001(n.s.)$, $N=16$)。(高次の回心体験後の)「気づき体験」と深いキリスト教理解 [[信念]・[効果報酬]・[効果責任]] とは有意な関連がないことが示された。

[22] (高次の回心体験後の)「気づき体験」→自我の中心領域への定着 [[共同体]・[信念]・[現実定義を代表し]・[表現する存在] [[行動]・[効果責任]]

[21] で有意な連関がみられなかったことから、(高次の回心体験後の)「気づき体験」と高次体験群における「自我の中心領域への定着 [[共同体]・[信念]]」および「現実定義を代表し、表現する存在となる [[行動]・[効果責任]]」がどのように関連しているかを検討するために、「共同体」・[信念]・[行動]・[効果責任]をそれぞれ目的変数、「体験」を説明変数として単回帰分析を行った。決定係数は、「共同体」で有意な値を示し、「信念」・[行動]・[効果責任]では有意な値は示さなかった ([共同体]: $r^2=.373(p<.05)$, $b=.611(p<.05)$, $N=15$; [信念]: $r^2=.056(n.s.)$, $N=16$; [行動]: $r^2=.002(n.s.)$, $N=16$; [効果責任]: $r^2=.001(n.s.)$, $N=16$)。(高次の回心体験後の)「気づき体験」から「共同体」に正の影響を与えている。すなわち、神、神の愛や神に関連する事柄を深く感じることによって、教会内での対人関係や教会への帰属感が深まっていき、キリスト教に関する現実定義が自我の中心領域に定着していくことが示唆された。

[23] 深いキリスト教理解 [[信念]・[効果報酬]・[効果責任]]→自我の中心領域への定着 [[共同体]^[2]

高次体験群における「深いキリスト教理解」を示す [[信念]・[効果報酬]・[効果責任]] と「自我の中心領域への定着 [[共同体]]」がどのように関連しているかを検討するために、「共同体」を目的変数、「信念」・[効果報酬]・[効果責任]を説明変数として重回帰分析を行った。

決定係数は、有意な値は示さなかった ($R^2=.250(n.s.)$, $N=16$)。「深いキリスト教理解 [[信念]・[効果報酬]・[効果責任]]」と「自我の中心領域への定着 [[共同体]]」との間には有意な関連がないことが示された。

[24] 深いキリスト教理解 [[信念]・[効果報酬]・[効果責任]] → 現実定義を代表し、表現する存在 [[行動]]¹³⁾

高次体験群における「深いキリスト教理解」を示す[[信念]・[効果報酬]・[効果責任]]と「現実定義を代表し、表現する存在となる [[行動]]」がどのように関連しているかを検討するために、「行動」を目的変数、「信念」・「効果報酬」・「効果責任」を説明変数として重回帰分析を行った。決定係数は、有意な値は示さなかった ($R^2=.279(n.s.)$, $N=17$)。「深いキリスト教理解 [[信念]・[効果報酬]・[効果責任]]」と「現実定義を代表し、表現する存在となる [[行動]]」との間には有意な関連がないことが示された。

[25] 自我の中心領域への定着 [[共同体]、[信念]・[現実定義を代表し、表現する存在 [[行動]、[効果責任]] → 「気づき体験」

高次体験群における「自我の中心領域への定着 [[共同体]、[信念]]」および「現実定義を代表し、表現する存在となる [[行動]、[効果責任]]」と「気づき体験」がどのように関連しているかを検討するために、「体験」を目的変数、「共同体」・「信念」・「行動」・「効果責任」を説明変数として重回帰分析を行った。決定係数は、有意な値は示さなかった ($R^2=.398(n.s.)$, $N=15$)。

[26] 「気づき体験」→「宗教性」の深まりと「宗教性」に基づく態度・実践 [[信念]・[効果報酬]・[行動]]

「気づき体験」と「宗教性」の深まりと「宗教性」に基づく態度・実践 [[信念]・[効果報酬]・[行動]]がどのように関連しているかを検討するために、「信念」・「効果責任」・「行動」をそれぞれ目的変数、「体験」を説明変数として単回帰分析を行った。決定係数は、有意な値は示さなかった ([信念]: $r^2=.056(n.s.)$, $N=16$; [効果報酬]: $r^2=.209(n.s.)$, $N=16$; [行動]: $r^2=.002(n.s.)$, $N=16$)。「気づき体験」と「宗教性」の深まりと「宗教性」に基づく態度・実践 [[信念]・[効果報酬]・[行動]]では有意な関連がないことが示された。

考 察

本研究では、青年における「宗教性」発達モデルを検討した。「宗教性」発達モデルにおける各局面ごとの関連・差異を検討することによって、青年期後期の「宗教性」発達について以下のような点が示された。

まずモデル全体を通して、概ね「宗教性」尺度の得点の高い＝キリスト教に傾倒しているクリスチャンほど「宗教性」発達モデルに適ったプロセスを経ることが示された（高次体験群で有意差がみられない局面は対象人数が少なかったことが影響していると思われる）。このことにより、キリスト教への関与の高さが、「宗教性」

発達に関わる重要な要因であることが確かめられたことになる。ただし、青年では、現実定義との接触～現実定義の内化～高次の回心体験までは各局面ごとに関連があることが示されたが、高次の回心体験（きよめの体験）以降では、各局面ごとの関連はほとんどみられない結果となった。

続いて、「宗教性」発達モデルについて特徴的な局面について考察する。

現実定義の接触→回心体験における契機としての聖書（の言葉）→（回心体験前の）「気づき体験」→「信念」・「回心体験（救いの体験）」への局面では、回心体験における契機としての聖書（の言葉）による違いがみられなかった。すなわち、これらの局面間については、回心体験による違いはみられたが、聖書の言葉の有無によっては違いがみられなかった。現実定義の接触～「信念」・「回心体験」の局面は、契機としての聖書（の言葉）の有無が分析の軸となっている。その軸となる聖書（の言葉）の有無に違いがみられないことが、それぞれの局面間における結果に示されたと推察される。

回心体験・「信念」→回心体験における確証としての聖書（の言葉）→洗礼を受けるへの局面では、回心体験における確証としての聖書（の言葉）の有無について「信念」との局面間のみは違いがみられたが、それ以外の局面では、聖書（の言葉）の有無による違いはみられなかった。

このことから、回心体験における確証としての聖書（の言葉）を有している高次の回心体験をしたクリスチャンがより高い「信念」を有していることが示唆された。さらに、回心体験における確証としての聖書（の言葉）から洗礼を受けるへの局面について有意な連関がなかったことから、「信念」から洗礼を受けるへの局面について検討したところ、この局面間においても洗礼を受け、かつ高次の回心を体験したクリスチャンがより高い「信念」を有していることが示唆された。

高次の回心体験は第2の転機とも呼ばれており、第1の転機である回心体験を経て高次の回心体験をすることがいわれている（日本ホーリネス教団教育局、2000）。第1の転機である回心体験を確かなものとする聖書（の言葉）を得た経験、洗礼を受けた経験は高次の回心体験へ進むプロセスにとって重要な要素になると考えられる。これら2つの経験に深く関わるのが「信念」の高まりということではないだろうか。回心体験をすることにより、神への、キリスト教への信念が高まる。その高まりが、回心体験における確証としての聖書（の言葉）を得る経験、洗礼を受ける経験へとつながり、それらの経験がさらに「信念」の高め、第2の転機である高次の回心体験へと結びつけていくのではないかと考えられるのである。

現実定義の内化に関する局面では、青年のクリスチャンにおいてもその効果の現れ方に違いがみられた。すなわち、洗礼を受けている高次体験のあるクリスチャンは、洗礼を受けている回心体験のあるクリスチャンよりも高い「効果報酬」を有していることが示されたが、「効果責任」では、回心体験および洗礼の有無の違いによって有意な差異はみられなかった。

青年では、より高次の回心体験のあるクリスチャンが

Table 15 暦年齢と高次の回心体験年齢との比較 (N=17)

暦年齢(歳)	21	22	20	20	18	24	19	20	19	22	22	23	22	23	23	24	24
高次の回心体験年齢(歳)	14	16	16	16	16	17	19	19	19	20	21	22	22	22	23	23	24

洗礼を受けることにより、クリスチャンとしての責任、責務以上に、クリスチャンとしての心の平安や幸福感が高まることが示唆された。

今回の結果では、洗礼の有無によって違いはみられず、回心体験の違いによって効果の現れ方に違いがみられた。ホーリネス系教会では、高次の回心体験によって神からの恩恵は増し、信仰が深まっていくことが示されているが(小林, 2004)、今回の結果からも、本人が高次の回心を体験したとの自覚により、神からの恩恵を受けたという感じ(「効果報酬」)が高まっていくことが示されたのではないだろうか。すなわち、より高次の回心を体験することが、クリスチャンとしての報酬を強く自覚させる要因となることが示唆されたといえる。この結果は、構成した「宗教性」発達モデル(松島, 2007; 松島・宮下, 2008)とは異なる結果ではあるが、本研究のモデルの検討によって新たな傾向を示すことができたと思われる。

先述したように、青年の「宗教性」発達モデルにおいて、高次の回心体験以降では、各局面ごとの関連がほとんどみられなかった。分析対象者が少ないことも、その理由の1つとして挙げられる。しかし、この分析対象者が少ないということは、高次の回心を体験した者が少ないことも意味しているわけである。高次の回心体験をした平均年齢は、19.4歳($SD=3.1$ 歳: 範囲14~24歳)であった。そのうち14~17歳(中学・高校生)の間に体験したのが6人であり、体験者の大半は、現在の青年期後期に体験している。このことから、青年では、高次の回心体験後間もないクリスチャンが多くを占めていた可能性が窺える。実際、暦年齢と高次の回心体験年齢との比較をしてみると、そのことを示す結果となっている(Table 15を参照)。

青年において、高次の回心体験後間もないクリスチャンが多くを占めていたが、高次の回心体験以降での各局面ごとの関連がほとんどみられなかったという今回の結果の原因の1つではないかと推察される。実際、成人における「宗教性」発達モデルの検討では、高次の回心体験以降の各局面ごとの関連について高次の回心体験後の時間の経過とともに形成されていくとの結果が示唆されている(松島, 2009)。成人の結果と照らし合わせてみても、高次の回心体験後以降のプロセスについては、時間の経過が関係していると示唆することができるのではないだろうか。

成人期は成人期の宗教性の様相があり、青年期は青年期の宗教性の様相があることが示されている(長谷川, 1969; 松本, 1979など)と最初に論じたが、本研究における青年の「宗教性」発達が成人の「宗教性」発達(松島, 2009)と異なる結果を示したことから、本研究においても、「宗教性」は各発達段階において異なる様相で示すと示唆することができたのではないかとと思われる。

引用文献

- Berger, P.L. & Luckmann, T. (1977). 日常世界の構成：アイデンティティと社会の弁証法(山口節郎, 訳). 東京：新曜社. (Berger, P.L. & Luckmann, T. (1967). *The social construction of reality: A treatise in the sociology of knowledge*. Garden City, NY: Doubleday.)
- Cornwall, M., Albrecht, S.L., Cunningham, P.H., & Pitcher, B.L. (1986). The dimensions of religiosity: A conceptual model with an empirical test. *Review of Religious Research*, 27, 226-244.
- Glock, C.Y. (1962). On the study of religious commitment. *Religious Education Research Supplement*, 57, 98-110.
- 長谷川浩一(1969). 発達. 高崎 毅・山内一郎・今橋朗(編), *キリスト教教育辞典* (pp. 414-421). 東京：日本基督教団出版局
- 星野 命(1977). 宗教意識の発達. 依田 新(編), *新・教育心理学事典* (pp. 376-377). 東京：金子書房
- 今田 恵(1955). 宗教意識の発達. 牛島義友・桂 広介・依田 新(編), *青年心理学講座：1巻 文化と人生観* (pp. 99-145). 東京：金子書房
- 小林和夫(2004). *論集『聖化論の研究』：ウエスレアン・アルミニアニズムの立場より*. 東京：日本ホーリネス教団
- 松本 滋(1979). *宗教心理学*. 東京：東京大学出版会
- 松島公望(2005). 日本人クリスチャンにおける宗教意識尺度の開発：プロテスタント教会一教派(ホーリネス系教会)を対象にして. *学校教育学研究論集第11号*, 東京学芸大学, 東京, 13-28
- 松島公望(2006). キリスト教における「宗教性」の発達および援助行動との関連：キリスト教主義学校生徒を中心にして. *発達心理学研究*, 17, 282-292
- 松島公望(2007). プロテスタント・キリスト教に関わる日本人の宗教性発達に関する心理学的研究—ホーリネス系教会およびキリスト教主義学校を対象にして—. 東京学芸大学博士論文
- 松島公望・宮下一博(2008). ホーリネス系教会に関わる日本人クリスチャンの「キリスト教における宗教性」発達モデルの構成. *千葉大学教育学部研究紀要*, 56, 31-45
- 松島公望・宮下一博(2009). ホーリネス系教会に関わる日本人成人における「キリスト教における宗教性」発達モデルの検討. *千葉大学教育学部研究紀要*, 57, 9-23
- 日本ホーリネス教団教育局(編). (2000). *教会員手帳*. 東京：日本ホーリネス教団
- 作道信介(1983). 入信過程に影響を及ぼす心理学的諸

要因の検討。日本心理学会第47回大会発表論文集，782

作道信介（1984a）. 入信以後の宗教的社会的過程：M 県 S 教会の専従者の場合。日本心理学会第48回大会発表論文集，677

作道信介（1984b）. 宗教集団の発展段階と入信過程：宮城県 S 教会を対象として。日本文化研究所研究報告別巻第21集，東北大学，宮城，31-59

作道信介（1986）. 羊と羊飼ひ：S 教会におけるアイデンティティの確立。日本文化研究所研究報告別巻第23集，東北大学，宮城，1-36

Verbit, M.F. (1970). The components and dimensions of religious behavior: Toward a reconceptualization of religiosity. In P.E. Hammomd, & B.Johnson (Eds.), *American mosaic* (pp. 24-39). New York: Random House.

脚 注

- 1) 作道（1983, 1984a, 1984b, 1986）は，Berger & Luckmann（1967）の所説に基づき，宗教的社会的過程を宗教集団における再社会化過程と位置づけ，回心体験を単に宗教体験を指すものとするのではなく，宗教集団における社会的問題として捉えることとした。宗教的社会的過程の定義は『個人が宗教集団において共有されている現実定義を内在化し，その定義を自我の中心領域に定着させ，それを代表し表現する存在となる過程』である。この定義のなかで，現実定義とは『宗教集団において各構成員に共有されている宗教集団のなかでの現実（人間の罪の問題など）への見方』を表している。
- 2) 「体験」の概念には，「回心体験」および「神や日常生活のなかで，神，神の愛，また，神に関連する事柄をどのように考え，感じているかの体験」の両方の意味が含まれていることから，「回心体験」との相違を明確にするために，後者の「体験」を「気づき体験」とした（松島，2007）。
- 3) 救いの体験とは，キリスト教において，自らの罪を悔い改め，イエス・キリストを救い主として信じ，自分の罪が赦されることをいう。本研究は，心理学的研究であるため，教会用語である救いの体験という用語は原則としては使わずに，「救いの体験」を「回心体験」と呼ぶことにする。
- 4) きよめ（聖化；Sanctification）の体験とは，「神より救いを受けた者でも，人間のなかに深く食い込んでいる罪の性質（これを原罪という）までは，救いの体験ではまだ処置されていない」とのホーリネス系教会の教えに基づき，神の恵みが，原罪の性質にまでおよび，故意に罪を犯すことがなくなり，自己中心的な生き方から神中心の生き方へと変化する体験をいう。こ

のことによってクリスチャンとしての本格的な成長がなされるとの見解をホーリネス系教会はとっている。そのため，きよめの体験は重視されており，きよめの体験を得るための集会（聖会）なども催されている。本研究は，心理学的研究であるため，教会用語であるきよめの体験という用語は原則としては使わずに，「きよめの体験」を「高次の回心体験」と呼ぶことにする。

- 5) 「効果」は，宗教意識と宗教行動の両側面を含む構成概念だが，回答者の認知的，感情的側面を測定することを目的とするために，宗教意識尺度に含めることとする。
- 6) 「知識」は，構成概念としては宗教意識に含まれるが，設問は知識の有無を調べるテスト形式をとらざるを得ず，評定法を使用する宗教意識尺度（単一尺度）として扱うことができない。したがって，宗教意識尺度とは別に宗教知識テストを作成することとする。
- 7) 効果責任の選択肢については，「まったく義務がない，あまり義務がない，少し義務がある，中程度に義務がある，強い義務がある，非常に強い義務がある」とした。
- 8) 宗教知識テストについては，できる限り幅広い範囲から出題するように作成されたため項目内容や回答方法の違いがある。この作成の経緯から他の尺度とは異なり a 係数において高い数値を示さなかったと思われる。
- 9) たとえば，礼拝出席，キリスト教の集会では，「ほぼ毎週出席した，月に 2，3 回出席した，月に 1 回くらい出席した，数ヶ月に 1 回くらい出席した，1 年に 1，2 回くらい出席した，まったく出席しなかった」とした。また，聖書通読では，「毎日，3 回以上読んだ，毎日，2 回くらい読んだ，毎日，1 回は読んだ，1 週間に数回は読んだ，たまにしか読まなかった，まったく読まなかった」とした。
- 10) 高次体験 [契機なし群] は，対象人数が 3 名だったため，判別分析については対象から外すこととした。
- 11) 高次体験 [洗礼なし] 群に該当する対象者が 1 名だったため，高次体験 [洗礼なし] 群は分析に含めなかった。[11]，[12] の分析も同様である。
- 12) 「深いキリスト教理解」および「自我の中心領域への定着」では，ともに「信念」が含まれている。同じ変数の関連を分析することはできない。モデルの順序に沿って分析を行っていくため，目的変数の「信念」は扱わないこととする。
- 13) 「深いキリスト教理解」および「現実定義を代表し，表現する存在となる」では，ともに「効果責任」が含まれている。同じ変数の関連を分析することはできない。モデルの順序に沿って分析を行っていくため，目的変数の「効果責任」は扱わないこととする。